

ファンがつくる 金沢競馬をもっと楽しむ情報誌

遊駿 plus

協力: 金沢ホースマンクラブ
協賛: 金沢競馬振興協議会
発行者: 遊駿 + 編集部

無料

ご自由にお持ちください

www.kanazawakeiba.com

KRC NEWS

ファンに名付けられた無敵のお姫様

サブノタマヒメ

ヘンシユーチヨ一のつづやき

やっぱり気になる 金沢競馬の「マニ」がヘン

ウィズ・コロナ時代の競馬場

2020年12月

vol. **44**

※ご意見、ご感想をお寄せください
宛先 E-Mail: yushun.plus@gmail.com
<http://sites.google.com/site/yushunplus/>

Photo by ゆうか



ファンに名付けられた無敵のお姫様 サブノタマヒメ

コロナ禍で無観客開催が続く金沢競馬で一頭のサラブレッドがデビュー戦を迎えた。

その馬はサブノタマヒメ。

馬名公募された今年デビューの二歳馬九頭の中の一頭で、

「馬名の頭に冠名の『サブノ』を付けて地元金沢に因んだ牝馬らしい名前をお願いします」

と、馬主の中川三郎氏がファンに名前を託した馬だった。

タマヒメは加賀藩二代藩主前田利常の正室珠姫（たまひめ）の事。百万石まつりでは毎年珠姫役決定がニュースになるほどに金沢市民には親しい歴史上の女性。まさに金沢に因んだ金沢らしい名前だった。

そんな可愛らしい名前をファンからもらったサブノタマヒメ。かわいい名前とは裏腹に、これがめっぼう強かった。

この日、デビュー戦となったスーパードリーム二歳新馬戦を二馬身半差で勝利すると、次戦のブーゲンビリア特別を二秒二差の大差で連勝。そしてその次のひまわり村特別を、これまた一秒三差の六馬身差で圧勝。



Photo by ゆうか

四戦目JRA認定サードニクス賞では斤量が二キロ軽い牡馬（一）に○秒六差の三馬身差に迫られるも、一番人気に答えて勝利。怒涛の四連勝を果たした。

そして迎えたのが初めての重賞、金沢プリンセスカップ。この重賞が行われたのは九月二十七日。

奇しくもこの日から無観客開催が解除、有観客開催となり一三〇〇人の上限はあるが初めてファンの眼前にその姿を見せた。

初めての重賞、少ないが初めての観衆と歓声、初めての十一頭立て、相手には門別デビューの認定勝ちの馬もいるなど一気の強化。連勝も続いているけどそろそろ負け時では、と不安視する声もあったが、開けてみると単勝一・六倍の圧倒的一番人気に推されていた。

ファンによって名付けられた彼女の、初めてのファンの目の前で走り。それはまさに圧巻と形容するにふさわしいものだった。

スタートから逃げるマナバレンシアを見るような四番手辺りで追走。向こう正面から進出を開始すると、コーナー入口でマナバレンシアに追いつき並走。

コーナーで柴田騎手の鞭が飛ぶマナバレンシアに対して、サブノタマヒメの畑中騎手は涼しい顔ですいーっと交わしていく。

直線に入って鞭が入ると、サブノタマヒメとマナバレンシアの差がぐいぐい広がっていく。マナバレンシアも食らいつつこうとするが差は開く一方で、その後ろの三番手以降は遙か後ろ。サブノタマヒメが悠々五連勝のゴールを駆け抜けた時には三馬身の差が開いていた。

もはや牝馬に敵なしと言った走りを目の当たりにしたファンは、喜びながらもその走りに笑うしかなかった。

さらに次走の兼六園ジュニアカップ。斤量五十六キロは出走十頭（一頭取消）の中でもトップタイ。ほとんどの牡馬よりも重い斤量だった。

それでもいつものように最終コーナーから直線で先頭に立つてこのまま押し切ろうとする走り。

そこに道中最後方を進んでいた六番人気キラメキビジョンが強襲。直線で差が縮まっていき半馬身差まで



Photo by Haruka

迫るもここから縮まらない。

このお姫様、勝負根性も大した物らしく、私の前は走らせないとばかりの走り。迫った半馬身差のままゴール。重賞連勝とデビュー六連勝を飾った。

無傷の七連勝を狙った金沢ヤングチャンピオンでは、早めに先頭に立ったところを門別から移籍してきたアイバンホーに最後の直線で交わされて初めて土がついた。しかし、最後まで食い下がり着差は半馬身。負けてなお強しの印象を残した。

しばらくはサブノタマヒメ一強と思われた所にこのアイバンホーや、金沢プリンセスカップで二着に敗れた後に金沢シンデレラカップで北海道や大井からの遠征馬を相手にして優勝したマナバレンシアもライバル

として名乗りを上げてきた。来年の三歳重賞戦線はかなり盛り上がりそう、そんな予感がする。

昨年、馬名が一般公募された中には北日本新聞杯、MRO金賞を勝ち石川ダービー二着、西日本ダービー三着と大活躍を見せたフジヤマブシがいた。

サブノタマヒメには彼を超えるような活躍を見せてほしい。そう、期待したいのはファンが名付けた馬での石川ダービー制覇、あるいは西日本ダービー制覇である。

また、同じ馬主のサブノジュニア（JBCスプリント）のような活躍も夢見たい。

そして、その時は今以上の観客で、今以上の歓声で彼女の走りを迎えられることを祈るばかりだ。



Photo by ゆうか



やっぱり気になる

金沢競馬の「ここがヘン」

今年はコロナ禍による無観客開催が続いた。その期間は約半年に及び、その間ファンはネット等での観戦となり、ステイホームで競馬を楽しむ事となった。

そんなステイホーム中の競馬で金沢競馬について気になる事があった。もちろん、クラストーを発生させまいと日夜対応に当たり、有観客開催にこぎつけた金沢競馬の中の人々の努力には最大の敬意を払いたい。それでも気になった事があった。

それは、情報の出し方について。ステイホームの間、金沢競馬の情報を手に入れようとすると、情報源はほぼインターネット。少ないながら一般紙やテレビもあるが、メインの情報源はネットであろう。

そのネットの情報、公式からの情報発信が少ない、と言うよりも「薄い」ことがファンとしては気になった。

たとえば、笠松競馬場で十月に行われたヤングジョッキースリーズ(YJS)トライアル。金沢から魚住、兼子の売り出し中の若手騎手二人が挑んだのだが、その事についてレース前に金沢競馬の公式アカウントからの情報発信は無し。遠征します、と言う事務的なお知らせすら無いように見えた。

一応、レース終了後に引用リツイートで結果のお知らせはあったが、これではあまりにもさみしい。事前に「応援してください!」と言った感じの盛り上げるツイートがあれ

ばもつと注目を浴びる事ができたのではないかと。ちなみに八月の園田で行われたYJSトライアルに兼子、木本騎手が遠征した時は、当日に「出場します」とツイートされていた。まさか笠松に行くこと知らなかった訳ではあるまい。

その一方で、評価したい点もある。今年は無観客開催が続く中(現地で抽選会ができない事もあってか) ツイッター限定のプレゼントキャンペーンを打つてみたり、以前に比べて多くのツイートをリツイートしたりと、発信力を強めて公式アカウントから金沢競馬を盛り上げていこう、という気概が見られたこと。

一時期の「告知と出来事だけが淡々と並ぶタイムライン」から脱却して注目を集めようとする姿勢は好ましく、ぜひこの調子で情報を充実させ続けてほしい。ところで、必要な情報を提供するのには当然として、必ずしも競馬に必要でない情報を入れるのも必要ではないかとも思う。

例えば「食堂はここが営業しています」とか、「この開催の誘導馬はこの子です」など。あるいは「これが厩舎のボス猫です」とかも。予想紙やネット配信からは見られないような情報が時々挟み込まれるとアカウントへの興味も増えるだろうし、注目も集まるかもしれない。

それはファンがするべき情報発信かもしれないが、公式だからこそできる内容も、そう言ったネタの提供ルートもあるはず。来年の金沢はJBCイヤーであり、これまで以上の注目を集める事になる。その注目を大きくして盛り上げるための一翼がネットで発信できることは間違いない。

笠松競馬のように町長自ら競馬のツイートをとまでは言わないが、様々な情報をどんどん発信し、充実したアカウントとなるように期待したい。

今年のツイートの最も反応があったであろう「競馬場内に野生猿が侵入」を越えるツイートが現れる事を望みたい。

しかし、まだ慣れないのが歓声の少なさ。たとえば白山大賞典直前のスタンドの様子。定員の1300人にも満たない観衆でいかにも寂しい。さらに寂しさに拍車をかけているのが、歓声の少なさ。歓声を上げる

と感染拡大の可能性も上がるので、いかに屋外と言えどもこれは危険な行為。当然のように声援は控えざる

を得ず、せっかく現地にいるのにネット配信で見ているかのような不思議な状態となっていた。そんな新しい日常が求められ続けよう来年、金沢競馬場ではJBCが行われる。開催される十一月はオリンピックも行われた後(のはず)で、ある程度の観衆を入れられる開催の方向性が見えているだろうし、そもそもワクチンが回って、ウィルス騒ぎ自体が収束しているかもしれない。

思えば前回のJBC金沢は初めてのJPN1が三レース行われたJBCであった。今回はコロナ禍後に初めての満員の観衆を入れたJBCとなるよう、ファンも感染対策を地道に続けていくしかない。とにかく今は、こんな寂しいスタンドでJBCを迎えることがない事を祈りたい。



ウィズ・コロナ時代の競馬場

新しい日常で有観客開催を始めた今年の金沢競馬。コロナウィルス感染拡大を避けるために様々な制限が加えられた中での開催となり、始めた時は本当にちゃんと対応できるのかな、と不安になったものだが：なんだかんだでファンも慣れてきているように見える。



ソーシャルディスタンスにも慣れたもの？

そんな新しい日常が求められ続けよう来年、金沢競馬場ではJBCが行われる。開催される十一月はオリンピックも行われた後(のはず)で、ある程度の観衆を入れられる開催の方向性が見えているだろうし、そもそもワクチンが回って、ウィルス騒ぎ自体が収束しているかもしれない。



白山大賞典直前とは思えない...



今年の覇者はマスターフェンサー！

白山大賞典

九月二十九日、無観客も危ぶまれていた今年の白山大賞典だが、上限付きながら観客を入れての開催となった。



リンノレジェンドと吉原騎手

1番人気は盛岡の前走マーキュリーカップを制した中央のマスターフェンサー。以下ロードレガリス、エルデユクラージュ、ロードゴラツソ、ヒストリーメイカーと中央勢が続ぎ、地方馬の最上位人気は6番人気リンノレジェンド。地元勢は8番人気のティモシーブルーであった。

ゲートが開くとリンノレジェンドが好スタートからハナを主張して一周目スタンド前で後続を離して逃げ

を打ち、それをエルデユクラージュが追走する。マスターフェンサーは四番手からロードレガリスと共に前を伺う展開。

二周目の三コーナードロードレガリスが先頭を捉えて並走、マスターフェンサーも前に取り付いて四コーナードこの二頭が並走。そのまま短い直線に入って馬体を合わせての追い比べ。

力が入る並走、二頭がゴール板を駆け抜けた時、頭差でマスターフェンサーが前に出ていた。続いて3着にロードゴラツソ、元金沢所属馬ヒストリーメイカーが4着、逃げたリンノレジェンドが5着に残った。

地元勢はティモシーブルーの7着が最先着となった。勝ったマスターフェンサーは重賞連勝で二勝目。鞍上の川田将雅騎手は白山大賞典初制覇となった。



マスターフェンサー

三歳時にアメリカ三冠にも挑んだマスターフェンサー。隠れた出世レースの白山大賞典を制していよいよ本格的にダートの上位戦線へ挑んでいくことになる。

ダート中距離の層はまだまだ分厚いがそこどこまで食い込んでいくか。今後の彼の走りに注目。

伝統の長距離戦で初重賞！

スギノグローアップ 北國王冠

十一月八日金沢伝統の重賞、北國王冠が行われ、全国でも最長距離の二六〇〇mの重賞の舞台に大井、川崎、船橋、そして兵庫の精鋭が集った。

一番人気は昨年の優勝馬兵庫のタガノゴールド。六月以来の久々の出走だが長距離での安定した走りが評価されて圧倒的な一番人気に押された。続くは昨年の二着馬で前走タガノゴールドを破って勝利を挙げた川崎のアッキー。そこに今年のイヌワシ賞で二着に入った大井のスギノグローアップが続ぎ、地元金沢のフジヤマブシが四番人気となった。

レースはジャーニーマンが逃げてアッキーが三番手、その後ろにタガノゴールド、スギノグローアップは中団から追走する展開。

大きく動いたのは二周目のスタンド前。ここで早くもスギノグローアップが先頭に立ち、タガノゴールドが追いかける。向こう正面では三番手にアッキーが上がるも差は大き



タガノゴールドと下原騎手

い。三コーナードに入ると前は二頭のマッチレースの様相。直線でタガノゴールドが前に出かけるもスギノグローアップが食い下がり差し返す。そして頭差前に出た所がゴールだった。

まさに力が入る直線での攻防。大歓声がないのが非常に惜しい名勝負となった。



スギノグローアップとタガノゴールド

スギノグローアップは七歳にして初重賞。重賞は六回出走して掲示板を外したのが一回だけという堅実な走りを見せていたが念願叶ったの戴冠となった。

このレースではゴール後にタガノゴールドが心不全を発症して帰らぬ馬となった。

そのとき、場内のファンはただ立ち尽くし、茫然と目の前で起きる事を見ていた。タガノゴールドを救おうと慌ただしく動く関係者、職員、下原騎手。

立っているのに全身に力が入らない……多くのファンは、祈る事と助かる事を信じるしかなかった。

無観客開催の時よりも静かで、重い時間がどれほど続いたのだろうか。沈黙を解くようにピンポン、と場内へのお知らせのチャイムとタガノゴールド故障の為に後検量をせずに確定する旨の放送が流れた。

すると下原騎手がタガノゴールドのそばを離れ、コースの外ラチ沿いをこちらに向かって歩き出した。

涙を拭う人、声を上げて泣く人、ベンチに座り込んで頭を抱える人。沈黙が破れて押さえていた感情があふれ出している人が多くいた。

こんな沈黙に包まれる競馬場は、楽しくもなんともない。本当に、二度と経験したくない。全てのレースにおいて、出走全馬が完走し、帰厩することを願いたい。